

コロリの恐怖

文政五年の流行

夏は様々な感染症に注意が必要となる季節です。昨夏には約70年ぶりに国内でデング熱の感染が確認され、今夏はリオデジャネイロオリンピックをはじめ、世界中でジカウイルスへの感染が懸念されています。このような感染症の原因となる様々な細菌やウイルスは、人々の広汎な移動によって国内に持ち込まれるようになりました。

今から194年前の文政5年(1822)、日本列島に初上陸したコレラもこうした感染症の一つです。当時、コレラに関する知識はほとんど無く、その症状の進行の速さから「三日ころり」「とんころり」などと呼ばれ、人々を恐怖に陥れました。

今回は、コレラ初上陸時における萩藩の状況と対応を紹介します。

1 コレラとは

コレラとは、コレラ菌が人体内で産生する毒素によって、激しい下痢と嘔吐が引き起こされる感染症です。コレラ菌に汚染された水や食物を摂取することにより感染し、一日以内の潜伏期の後、下痢を主症状として発症します。重症の場合、腹部の不快感と不安感に続き、突然下痢と嘔吐が始まります。下痢便は「米のとぎ汁様」(rice water stool)と形容される白色か灰白色の液状便であり、これが一日に10リットルから数十リットルも出て、急激な脱水状態に陥り、眼が落ち込み頬がくぼむ「コレラ顔貌」を呈するなどの症状が見られます。さらに進行すると、意識消失・痙攣が起こり、最悪の場合、死に至ります。

2 コレラの萩及びその周辺地への伝播

この病が日本列島へ上陸したのは、今回紹介する文政5年(1822)の事例が初めてとされています。

田中助一『防長医学史』に引用されている「萩市越ヶ浜中善寺過去帳」には、当時の萩藩内における流行について、以下のように記されています。

此ノ病ヒ対馬ヨリハヤリ来リ、下関伊崎新地前後甚シ、回船之者痛ミ来ルル也、下関・萩城・越ヶ浜・漁人町・鶴江・玉江・小畑各浦甚シ、大井・奈古小々、川上其外ハ所処ヨリ病ミ帰り少々有之、八月十日比ヨリ萩浜崎病ミ始、当浦八月十四日ヨリ病ミ始、九月下旬迄ニ納リ候事



これによると、コレラは対馬から下関へ伝わり、廻船のネットワークにより、下関から萩城下町、越ヶ浜、小畑、玉江、大井、奈古と、日本海側の浦々を伝播していったことがうかがえます。

なお、この時のコレラは大坂において大流行しましたが、江戸までは到達しませんでした。

3 萩における流行状況

藩密用方の公務日記である「密局日乗」には、文政5年8月19日条(資料1)に、以下のように記され、

萩城下で流行が始まったことがうかがえます。

急霍乱共ニテ候哉、吐瀉等甚敷有之、只半日位ニテ病死之者多ク有之候

霍乱(暑気あたりによって起きる諸病の総称で、当時は吐いたりくんだりする症状をいった)であろうか、甚だしい嘔吐と下痢があり半日程で病死するものが多い

翌20日条には、盗賊方の中島九郎兵衛、山代下代役の中村源右衛門も「急霍乱」によって死去し、21日条には同じく山口代官の馬屋原閑蔵も死去するなど、感染は藩の役人達にも及びました。

同23日条には、一昨日(21日)に萩城下の魚店新町においてに18人の死者が出たとの風説が記され、同時に「急病遁れ候ましなひ歌」が紹介され、さらに同24日条には、萩近辺のみで一日に130人が死亡、その後も一日に100人程度の死者が出ている、との風説が伝えられています。

この時の正確な死者数は分かりませんが、当時大坂にいた三田尻出身の医師斎藤方策は、友人に宛てた書状の中で、「長州萩にてさへ八月十四日より二十五日迄の内、死する者五百八十三人と申来り候」(大槻磐水「文政壬午天行厲氣揮霍撩乱病雑記」中外医事新報1131号)と、わずか10日余の短期間で583人の死者が出たとの萩からの情報を伝えています。

このように文政5年8月末、萩城下は得体の知れない病「コロリ」の恐怖にさらされていました。

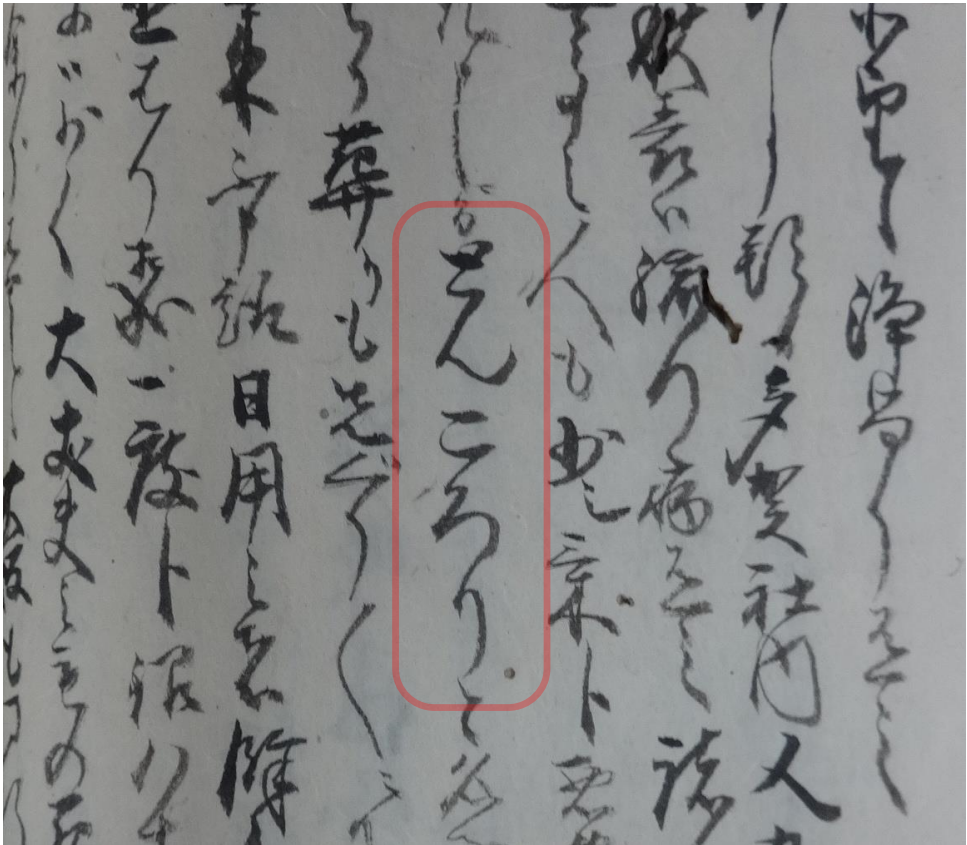
一方、多賀神社大宮司の記した「文政見聞記」(資料2)には、萩では夥しい数の人々が死んでいるが、山口では1人の死者もないと述べており、当時の流行が内陸部の山口までは及んでいないことをうかがわせます。

4 藩の対応と翌年の流行

このようなコレラの猛威に対して、藩はどのような対応をとったのでしょうか。

当時、江戸にいた藩主斉熙は、麻布の萩藩下屋敷の一画にあった円明院において、9月26～28日の2夜3日、病難消除の祈祷を行って国元へ御守札を送り、城門などへ打ちつけておくよう沙汰しています。

国元においても、満願寺・春日社・椿社・養学院・龍福寺で七日間の祈祷が行われ、同じく各寺社から御守札を差し出させたことを江戸へ知せています。



【資料2】「文政見聞記」(多賀社文庫1206)

当時、コレラ菌やその感染の仕組みに関する知識はほとんど知られておらず、人々は対処法が分からず、ひたすら神仏に祈るしかありませんでした。

翌文政6年8月、再びコレラの流行が確認されると、藩は、江戸から御守札3,200枚、加持の芥子(けし)1升5合を「早之早飛脚」で国元へ送り、御守札を家来に1枚ずつ、領内の村ごとに1枚ずつ配るよう手配しています。また当時の領内総人口を647,899人とし、芥子は各人1～2粒を配る計画でした。このことから、当時、いかに藩がこの病気を恐れていたかがわかります。

この年の流行により、直御目付の楊井謙三や表番頭の三井左中など藩役人も数名死去していることが「密局日乗」で確認できますが、幸いにも前年と比較して流行の程度は軽かったようです。

この後、文政12年(1829)頃までは、毎年夏前に満願寺への祈祷及び御守札の配布などが毎年行われています。

※本展示は第11回アーカイブズウィークにおいて「コレラの流行」として紹介したものから、文政5年の流行を中心に加筆したものです。

展示資料

- 資料1「密局日乗」毛利家文庫19日記18(129の73)
- 資料2「文政見聞記」多賀社文庫1201
- 資料3「諸事小々控」毛利家文庫31少々控20(37の15)ほか

参考文献

国立感染症研究所HP「コレラとは」
(<http://www.nih.go.jp/niid/ja/diseases/ka/cholerae/392-encyclopedia/402-cholera-intro.html>)

田中助一『防長医学史』上巻、防長医学史刊行後援会、1951年
山本俊一『日本コレラ史』東京大学出版会、1982年
大槻磐水「文政壬午天行厲氣揮霍撩乱病雑記」中外医事新報1131号